

小原さんは「私もこの細い手で、皆さんの万一のときの、自決用の薬を包んだものでした」と泣きながら話してくれた。

満州に行った人々には、人には言えないそれぞれの苦労があったのだ。

## やっぱり私は大和撫子だった

福島県 佐藤 チェ

私の先祖は、猪苗代湖の湖南の地に代々住んでいた。曾祖父は昔、二本松と会津との国境で争いがあったとき、手柄を立てて殿様からの褒美で一山増やしたとか、祖父は「どぶろく」を醸造して一年に米四俵分を飲み、ほとんど飯を食べなかったとか、親戚の木田少尉はノモンハン事件に出征して、戦死した大隊長の片腕を背負って陣地に戻ってきたとか、父は酒が入ると、そのことをさも自慢そうに話していた。

また、父は祖父の飼っていた種付け用の牡馬によく

乗っていたそうで、酒と馬とが大好きだった。私はそのような父と、働き者で女傑といわれた母との間に三女として生まれた。全部で十人の子でくさんで、父や母がいくら一生懸命に働いても生活は苦しかった。しかも時代が昭和の大不況であり、少しばかりの田畑を借りての小作農では、その日その日の生活は大変なものだった。

そのころ、大槻町の周辺からも満蒙開拓の国策の声にそって、一家を挙げて満州に移る家が多かった。父も元々豪気で自信満々の人柄だったので、満州に行きたい気持ちはやまやまであったようだったが、何せ二人という大所帯を抱えての決断はなかなかできないでいた。そのうちに、一番上の姉が結婚して、開拓義勇団の花嫁として満州に渡ってから、急に真剣に渡満を考え出した。

そして、とうとう昭和十七年の春に、家族全員で渡満することになった。私が教え年十一歳で小学校四年生になったときであった。

汽車に乗ったり、船に乗ったりの数日が過ぎて、や

つと福島県集開拓団の三江省富錦県筆架山開拓地に  
入植した。途中の住木斯市は、新鮮で活気に満ちた街  
で、その有様が今でも思い出される。

筆架山周辺は、山と河に囲まれた広い平野で美し  
く、故郷の大槻にどこか似たところのある土地で、第  
二の故郷となるには申し分がないと、家族一同大いに  
気に入っていた。

父は早速に第四部落長になり、活動を開始した。し  
かし、意外にも開拓団には農業に不慣れな人が多く、  
勤労意欲も他の開拓団の人と比較するとやや低調で、  
経営もあまり進まないようであった。

開拓団本部も同様で、士気は旺盛でなく、部落の面  
倒はよく見てくれなかったようで、新設の部落造りは  
難事業であり、トラブルが相次いで発生した。さすが  
豪気で負けず嫌いな父も心労が重なり、元気がなくな  
ってきた。また、それにつれて母も弱り、痛々しい姿  
が私にもはつきりと分かるようになった。しかし、国  
内には叔母や親類縁者が多くいて、みんなで助けてく  
れた。

段々と原住民の満人の人々とも交流ができて、家に  
遊びに来るようになり、にぎやかになった。はるばる  
と異国に來たという哀愁も感じることなく、他の団員  
の人たちがうらやむような毎日であった。

兄や姉たちは、朝から夕暮れまで父母の手伝いをし  
て畑で働いていたので、私や四人の妹は何も心配する  
ことなく、家でも学校でも楽しく平和に過ごしてい  
た。

団の中では生活に困ったり、病気になったり、日本  
に帰ったりする人が出てきた。

私はもう少し大きくなったら、兄のように馬に乗っ  
て、この広い野原を縦横無尽に駆け回ってみたいと思  
うようになった。

こんなに平和で楽しい毎日を過ごしていたが、戦争  
の様子が必要しもよい方向にはないことは、子供だっ  
た私にも薄々と分かるようになっていたが、しかしま  
だまだ遠いことのように思っていた。

昭和二十年の春がやってきた。周囲の様子は変わら  
ず、筆架山の姿も緑色が日に日に濃くなり、ひばりも

空高くさえずり、畑仕事も始まり、平穩な農村風景には変化がなかった。戦争をしているところから見れば、全くの別天地であった。

その春に私は国民学校を卒業した。両親からは卒業したら看護婦になれと言われていたので、佳木斯市内にあった病院の看護婦見習となった。しかし私は、女でも父の気性に一番似ていたし、また母の性格も強く受けていたので、どうせ看護婦になるのなら、普通の看護婦ではなく、日赤の従軍看護婦になり戦地で働きたいと思うようになっていた。

昭和二十年五月に、長兄の榮司に召集令状がきて軍隊にいった。更に六月には次兄正にも令状がきた。団の他の家の男の人たちも、次々といなくなってしまう。開拓の仕事がこれから忙しくなるというのに、どうなるのだろうか、女心にも心配になってきたが、家にはまだ三番目の兄が、姉と二人で頑張って野良仕事に精を出していた。

しかしそれも束の間のこと、八月の初めになってその兄にも召集令状がきて、佳木斯の部隊に入隊した。

まだ十七歳だったので、勇兄にはこないだろうと、両親も安心していたので、その兄が兵隊に行ったことで、両親のショックは大きかったようだった。その当時、私はまだ佳木斯の病院にいたので、部隊に面会に行つたが会うことはできなかった。

昭和二十年八月八日、ソ連軍が突然に満蒙国境を突破し、侵攻してきた。全く考えていないことであつた。

そして団本部から避難命令が出て、部落も大騒ぎとなった。私も家に帰るよう連絡を受けて急いで帰つた。そのころまでは、まだ汽車は動いていた。

そのうちに現地住民の動きも不穩な様相を見せるようになってきた。その時点までは取りあえず安全地区に一時避難して、ソ連軍を追い払つたらまた戻るといふ考えで、当座必要な生活用品や衣料、食糧などをまとめて荷造りをした。家に遊びにきていた親しい現地人が手伝いにきて、馬車二台に荷物を乗せて出発した。これが筆架山の見納めになるとは思ってもいなかつた。

途中で激しい雨に遭い、道が泥濘化して馬車の動きが困難になり、避難行は最初から難儀をした。そのうちにととう馬車が言うことを聞かなくなり、せつかくの荷物を次々に捨てて佳木斯に向かった。

私たち子供四人は、父母らに守られてやっこの思いで佳木斯に着いた。佳木斯からは、兵隊さんたちに励まされてやっこの最終の避難列車に乗ることができた。

車内は避難者ですし詰めの状態だった。佳木斯の市街は、火の海となっており、時折、何かが爆発するの、物凄い音がして火柱が高く上がるのが見えて、恐怖のどん底だった。つい二、三日前までいた病院がどうなったか気にかかったが、確かめるどころではなかった。途中、空襲や脱線事故やらで避難列車は難行し、ほうほうの態で、みんな生きた心地がしなかったが、私は割合にしっかりしていた。

やっこの思いで緩化に着き、飛行場の格納庫に収容された。そこで日本が無条件降伏し、戦争が終わったことを知った。みんな呆然としていたが、私はこれから一体どうなるのか、家族がそろって故郷大槻に帰れ

るのだろうかと考え始めた。しかし十四歳の私には、それ以上のことは考えられなかった。ただ前途に対する不安だけだった。

父や母とも「私たちはどうなるの？」と話し合いましたが、父母にもよい知恵もなく、成り行きに任せるほかないということになった。果たして生きて日本に帰れるのだろうか。

緩化の飛行場にいた兵隊さんたちは、みんなソ連軍に武装解除をされて、丸腰になってシベリアに連れていかれたのを見た。

昨日まで親しく接していた満人も、手の裏を返すように態度が変わってきた。暴動や略奪が始まり、毎日が恐ろしくて恐ろしくて、一時も安心することがなかった。

満人だけでなく、ソ連兵も「時計を出せ」「金を出せ」と言っただけで銃で脅しては強奪していった。もっと恐ろしかったことは、「女を出せ」と言ってくることだった。ソ連兵が来ると、男の人たちが私を囲んで、その中に小さくなって隠れた。それでソ連兵に見つから

ずに助かった。

緩化の格納庫でしばらく避難生活をしていたが、そこも段々と奥地から逃れてきた人々が増えてきたので、私たちは哈爾濱に行くことになり移動を開始した。

途中で暴徒からの襲撃を受けたりして、わずかに残っていた荷物もほとんど取られて、それこそ着のみ着のままの姿になった。食べ物も乏しくなり、飲み水もなく、栄養失調になる人が出てきた。赤ん坊や幼児が次々と死んでいった。

ようやく哈爾濱に着いて収容所に入ったが、安心感からか大人も多数死んでいった。隣にいた人も朝になって死んでいたが、あまり感傷を覚えなかった。

父は、家族と一緒に避難してきた人たちのために大活躍をして働いていたし、母も現地人の家から米や砂糖を買ってきて、大福や団子などの食べ物を作って街角で売った。私も売り子になって働いた。家族みんなで力を合わせて働き、その日暮らしの生活をしていたが、大変だった。

そのうちに、発疹チフスが流行し、死人が続出したが、幸いに私の家族は病気にかからなかった。しかし治安は相変わらずに悪く、強盗やけんかが絶えずに、不安のどん底であった。食糧にも困るようになってきた。

十月になって、寒さが身にひしひしと感じられるようになってきて、今度は寒さが原因で死ぬ人が出てきた。

なるべく南の方に移るほうがよいという意見が出た。みんなは焦りだしてきた。私たち一家も、その人たちと一緒に少しずつ南に向かって移動していった。

十一月になってやっと奉天に到着した。十一月の奉天はひどい寒さだった。

奉天では、小学校の教室が収容所であったが、そこも避難民でごった返していた。私たちの家族は教室の隅に住んだが、手足をゆっくりと伸ばすこともできないくらい窮屈だった。

相変わらず毎日のように死人が出た。校庭に穴を掘ってそこに入れたが、死体は山のように積み上げられ

て焼かれた。焼かれたあとにすぐまた死体が入れられてあつた。この地獄のような状態は常のこととなつてしまつた。

街内の家に入れてもらつてゐる人もあつたが、とても足らずに、遠く離れた陸軍の官舎に移り住んだ人もあつた。

毎日満人が来て、「子供が欲しい」と言つたり、「嫁に欲しい」と言つて物色してゐたが、段々連れて行かれる人が出てきた。どこかに売られるのだからとうわさをされてゐた。こんな状態になつてきても父は強気で、「北満はええ所だつた。何とかして再び戻つて、馬をふやして大百姓をやりたい」などと言つてゐた。

そうしてゐるうちに、家族の中にも段々と病氣をすける者が出てきた。兄の子の司と、一番下の妹トシ子が病氣になつたが、医者にも診せられず、栄養のあるものも食べさせられず、かわいそうに次々と死んでいった。それまで元気だつた母も、氣落ちしたのか病氣になり、私たち姉妹はとても悲しくなつてしまつた。

とうとう街外れの陸軍官舎に移る決心をした。官舎

は新しくあつたが、街内に遠く、商売をするには不便であつたが、それよりもゆつくりと休めるところが欲しかった。

寒さが一層厳しくなつたが、燃料がないので空き家を壊して焚いたり、薪を作つて売りに行つたりした。

あの豪氣であつた父もついに病氣になり、「こんなことではあきらめきれない、何とかしてもう一度やり直したい」と言いながら死んでいった。私たち家族を守り、何とかして故郷に帰ることのみを願いつつ、命を使い果たしてしまつたのだつた。

母の病氣は少しずつ持ち直してゐたが、父を亡くした一家の悲しみはなかなか消えることなく、毎日毎夜、母を睨んでは泣き悲しんでゐた。避難民として受ける配給の食糧は、高粱が少しで、寒さが本格的になる中でどうやって暮らしたのか、その時の様子は全然記憶に残つてゐない。二人の姉もそれぞれの家族と一緒にどこかに行つてしまひ、頼りにならなくなつた。

そんな生活をしてゐるうちに、妹のミエ子と勝子が病氣にかかり、医者に診せることもなく死んでしまつ

た。何もしてやることができなかつた。

母と私と妹のミヨ子の三人で一緒に生活していたが、心細く、肩を寄せ合つて、その日その日を過ごしていた。

そんな時、王少清という体の大きな男が、度々私たちのところに来て親切にしてくれた。そのうちに、王が自分の家に来ないか、食べる物には不自由させないと何度も言うので、母と話し合つて、とうとう決心し行くこととした。その時にはまだ王の心の内はよく分からず、私たちの生活を見て、哀れだと思ふ親切心で言ってくれるのだらうという思いだけだつた。彼の家は大きくて、生活は豊かなようで、家族もよくしてくれた。私たちも次第に心を開き、その親切を受けるようになった。「溺れる者、藁をもつかむ」という気持ちだつた。

王には、私を嫁に欲しいという下心があつたことが、段々と分かつてきた。私は十五歳にならうとしていたが、色白で体が大きかつたので、体の大きい王が気に入っていたようだつた。

苦しくて恐ろしい避難民生活の中で、一緒にここまで逃げてきた開拓団の仲間や知人は、病氣や栄養失調で死んでいったり、また、いろいろな理由から段々と離散し少なくなつた。そして次々と事件も発生して、いつの間にか行方知らずになる人もあつた。そんな時、少しでも安全な生活の中にいるということはありがたいことであり、王一家の親切が少しづつ感謝の気持ちに変わつていった。

王の家で世話になつてゐるうちに、冬が過ぎ春が近くなつてきた。待ち望んだ日本への引揚げの話が流れて、更に南への移動が始まつた。そんな時になつて、私たちは随分と悩んだ。

兄嫁は行方知れずになつてゐるし、一番上の姉は長男を満人に預けていたが、その満人は長男を連れたまどこかに行つてしまひ、このままでは日本に帰れないということになり、長女と一緒に残留する話になつた。私は、王が親切にしてくれるし、あの寒い冬に半年も世話になつた恩もあつたので、どうしたらよいかと判断に迷つた。

かつて、日本は戦争に負けたら、女は全部アメリカ人の犠牲にされると教えられていたので、今、占領されている日本内地では、日本人、特に女はどんなにひどい目に遭っているだろうか、恐らく今まで目にしたソ連軍と同じようなことをやられているのだろう、否、もっとひどいことをされているかもしれないと考えた。それよりも多少なりとも気心の知れた、中国人の方がまだよいだろう。特に王少清は良い人だから、このまま世話になる方がよいだろうと考えた。母にもそのことを相談したが、母はどうしても日本に帰りたということだった。一番上の姉も残留することだし、他にも残留する者がたくさんいたので、私は安心して一大決心をし、「地獄で出会った仏」の王家にとどまることに決めた。

母は私に心を残しながら、次姉と一歳になる子供、そして妹ミヨ子の四人で、他の引揚げ希望者と一緒に南下していった。

これが、今まで一緒に苦勞してきた家族との一生の別れになるのかと思うと、私も悲しくて涙が流れ落ち

た。しかし、自分で決心したことなので悔いは残らなかった。私は生来、父や母に似て気が強いと言われていたが、それがよいのか悪いのかは分からないが、こうと決めたことはやり遂げる性格であった。日本に帰る母や姉妹の無事を祈りながら、頑張るしかなかった。

当時の中国の国内も大変で、国民党軍と中共軍とがお互いの主導権を争って戦をしており、勝ったり負けたりして国内は混乱していた。そのうちに国民党軍が敗北して、大陸から撤退して台湾に逃げ、やっと内戦から解放され一時的に平和が訪れた。大陸の人たちは生活力を強めてきた。奉天も瀋陽と変わった。

瀋陽地区にも残留日本人が多く生活していたが、みんな一様に敗戦国人ということで、あらゆる面で軽蔑され、子供は「鬼の子」とののしられ、いじめられた。

私も、いくら王には親切にされても、嫁という立場になったら家族からは厳しくされ、改めて異民族の家庭での苦勞を骨身にしみて知ったものだった。



頼りにしていた一番上の姉チヨが、昭和二十一年十月に、身を寄せていた中国人の家で重病にかかり死んでしまった。一人残った子供悦子を、私と王と二人でその家に行き、渡さないと言うのを力づくで引き取り、我が子として養育することになった。

こうして、幸福か否かは分からないままに、夢中で残留日本人としての人生が始まった。

王は電気の技術を持っていたので、電気技師として会社に勤め、段々と地位も上がっていった。私も学校の職員として働いていた。夫婦共に共産党員になり、学習にも一生懸命に努力をして、残留日本人としての意地を張った毎日だった。

しかしその半面、「日本はどうなっているのだろうか、母や姉妹は無事に日本の土を踏んだのだろうか、たとえ無事に日本にたどり着いても、アメリカからひどい仕打ちを受けているのではないか」などと考え、故郷の山や、村や、子供時代の友達顔を思い出している泣いていた。

思い返してみると、初めて満州に渡ったころは、日

本人としての誇りや、新天地開拓という理想や、あの広野で思う存分馬に乗って駆けめぐる希望などで新鮮だった夢も、今は色あせてしまい、一人で思うだけになってしまった。

中国人ばかりの中での日常生活は味気なく、そしてあの避難行のときの恐ろしかったこと、辛かったこと、その後の生活の哀れさなどが去来して、悲しみが常に心から去らなかつた。

それでも、一緒に残留している仲間比べたら、私はずっと幸せだったと思っている。他人に負けないように「毛主席万歳」を叫びながら活動を続けた。

王との間には、息子一人、娘二人の実子と、姉の子悦子を合わせて四人の子供がいて、その母親としての子育てに、私の全精力をつぎ込んでいた。

そのうちに文化大革命が起きて、残留日本人への風当たりも強くなって、「日本人狩り」と称する迫害がひどくなってきた。迫害と危険が常に私の身辺にあり、家族にも及んでいたため、日夜神経をとがらせていた。残留者の中には、紅衛兵に襲われて市中を引き

回されて、挙げ句の果てに自己批判をさせられたり、暴行を受けたりした人もあった。私は、目の前でそのリンチを見て恐ろしくなり、家に飛んで帰って隅でぶるぶると震えていたこともあった。

この危険から少しでも逃れるには、ただ一つ、毛思想の学習を一生懸命に受けて、体制維持に努力するしかない。王も私も、それこそ家庭生活をある程度犠牲にしても学習に励んだので、幸いに捕まることはなかった。仕事も頑張ったので生活に困るようなこともなく、貯金もできた。子供たちも元気に成長していった。

生活もある程度落ち着き、気持ちの上からも少しずつ余裕ができてくると、段々と日本を思い出すようになってきた。そして母や姉妹たちのことが恋しくなり、夢に見るようになった。昭和二十六年の秋に、思い切って日本に手紙を出してみた。

しばらくして、その返事が義兄からきたときは心が躍るように嬉しかった。案じていた母や姉妹は、無事に引き揚げて元気にしている。二人の兄も復員して帰

ってきたとのことだった。日本も復興して平和になったとあった。また、「今、お前は幸福か」と書いてあり、急に故国が恋しくなり、中国に残った私は間違っていたと後悔するばかりだった。それからは望郷の念が込み上げて、日本に帰りたいという気持ちに日に日に募ってきた。やっぱり私は大和撫子だったのです。どうしても日本が忘れられなかった。残留者の仲間からも日本の様子がいろいろと耳に入ってきた。

手紙を出す回数も段々と多くなってきたが、返事をくれるのはいつも義兄だった。母や姉妹からの手紙がないのが淋しく、本当に元気で暮らしているのかと疑うようになった。一度帰ってみたいという気持ちがますます高じてきた。しかし、まだ日中間の国交が回復していなかったたので、実際には帰国することはできなかった。

そのうちに、王が健康を害した。もともと心臓が弱かったのが、生活の疲れから一層悪くなってきた。義兄から送ってもらった婦人雑誌の広告で見ていた、心臓病によく効く薬を送って欲しいと頼んだら、いろいろ

ろな薬を送ってくれた。おかげで、王の病気もよくなってきた。

昭和四十七年、日本の田中首相の努力で、日本と中国との国交が回復し、お互いに交流することができるようになった。私たちの長年の希望が実現した。

昭和五十年二月、私は同じ福島出身の残留日本人の加藤さんと一緒に一時帰国した。羽田空港では兄や姉妹が出迎えてくれて感激の対面をした。嬉しかった。

祖国日本、故郷福島の風景は新鮮で美しく、郷里の人々や同級生たちの心温まる歓迎に感激した。市街地や農村も立派に復興して、戦争前の様子とは雲泥の差だった。人々の服装も美しく立派で、私たち中国人の服装とは全く異なっていた。食料品も豊富で何でもあった。中国で聞いていた話とは全然正反対で、まるで夢の中にいるようだった。

私は、自分の意思からではあったが、中国に残留したことは失敗だったということを改めて感じ、悔しさが込み上げてきた。

母も健康で、いろいろな仕事をしてお金を貯めていた

し、兄も、姉も、妹もそれぞれ立派な家を建てていた。小学校時代の友達もみんなよい生活をしており、何不自由のない様子だった。車を持っている人も多かつた。

親切心から、衣料品や電気製品やお金などいろいろともらったが、嬉しいことは嬉しかったが、その半面、心の中ではやはり悔しさが満ち満ちていた。

私は、体は丈夫で性格は勝ち気で、負けん気が強いので、終戦後すぐに帰国していたら、だれにも負けずに頑張って、今頃は家も建ててお金も貯めていたのにと思い、残念だった。私は、一時帰国で滞在中に建設現場だろうが土木工事だろうが、何でも構わずに真っ黒になって毎日働いた。少しでもお金を貯めたかった。

そしてその傍ら、全国各地の観光にも行った。兄嫁の昌子と気が合ったし、彼女も親切で気前がよく、私と性格が似ていたので、一緒に北海道や佐渡や、そのほかいろいろなところに連れて行ってくれた。

小学校時代の友達にも世話になり、遊び回り、酒を

飲み、酔って夜遅く家に帰り、母に叱られて口争いになり、拳げ句の果てにはいろいろなことを思い出して泣きわめいたりした。

こんな生活をしているうちにも、中国に残してきた王からは毎週のように、また子供からもしょっちゅう手紙が来た。もしかしたら、私がこのまま日本に残るのではないかと心配していたようであった。母からもそのことを言われた。定められた里帰りの期間の一年が、あつと言う間に過ぎようとしていた。本当はこのままもつと長くいたいという気持ちでいっぱいだった。姉や妹も私の気持ちは分かっていたが、母や兄たちからは帰国すべきであると懇々と諭されて、仕方なく帰国することとした。

やはり現実の私は、王愁文という中国の女だった。私が無事に帰ったので、王や子供たちは安心して喜んでくれた。

だが、私は故郷を忘れることはできなかった。それは私だけではなく、残留日本人で一度里帰りした者は、だれでも例外なくそうだった。それが普通であっ

た。

祖国というものは、世界中のどこよりもよいものである。

私は、自分で選んだ運命を悔やむことなく「毛沢東思想」を大切にして学習に励み、生涯を中国の地で終えようと決心していたが、今、日本に帰り、様子を知ってからは決心が揺らぎ始めた。

戦時中、日本がこの戦争に負けたら敵国の奴隷になる、奴隷になるよりは死を選ぶのが日本人だと教えられていた。しかし現実には、日本人は奴隷にならず、自由な生活を送っているのではないか。それに比べて私は、貧しい生活をしているときに親切にされたということに残留し、敵国人と結婚し、中国人から憎まれ馬鹿にされながらも、恥を忍んで今日まで生きてきた。

毛主席を神様のように信仰していたが、文革では紅衛兵等を扇動して社会を混乱させたし、共産党員は同じ中国人でありながら一般大衆を威圧していた。また、私は一時帰国をしている間、共産主義は正しいとみんなに話をしていたのに、日本の共産党員は私に接

してこなかった。段々といろいろな矛盾を感じるようになった。

年を取ったせい、帰国してからの私は、王と争うことが多くなった。もう一度日本に帰りたいたいと思いい手紙を出したが、今度は歓迎されなかった。私は一人で手続きをして日本に行った。その少し前に、行方不明だった姉チヨの長男薫の消息が分かり、養母と家族五人を連れて永住帰国をした。私はもうだれにも遠慮することなく自由になった。もう中国には帰る気がなくなっていた。子供たちも成人し、それぞれ家庭を持っていた。

私は王少清に恩を受け、愛された。よい人だとも思っていた。人は私を幸福だったろうと思うだろうし、半面わがままな女と言うだろう。でも私の心は、満州国が不幸で、そこに居合わせた全ての人が不幸だったと思うようになった。私は誇り高き日本人として輝く人生を送りたかったし、熱い恋愛もしたかった。しかし、王少清の妻、王愁文としての運命に順応するように心掛けてきた。だが、耐え忍ぶことができなくなっ

ていた。

郡山市で働いていたが、そのうち息子が家族を連れて移住してきた。息子は以前、日本に電気関係の仕事の研修に来たことがあって、日本の様子を知る程度知っていた。またしばらくすると長女とその家族、そして次女も私を頼って移住してきた。別に私が強く呼び寄せたわけでもないが、やはり母恋しさに故国を捨てたのだ。当然のごとく王もやって来た。王は私に同居を求めたが、応じなかった。荒っぽいけんかもしたが、私の心は遠ざかるばかりだった。王には気の毒とは思ったが国際結婚は破局を迎えた。王は裁判にかけると言ったが、だれも協力する人がなくあきらめたらしい。子供たちも、郡山よりもっと金になる仕事を求めて、東京に行った。王も一緒に去っていった。

いよいよ私一人となった。特別な技術も持っていないので、中華料理等の経験から寮の炊事婦になったり、建設現場の賄い婦をしたりした。転々と渡り歩いて威勢のよい人たちを相手に面白く過ごしていたので、酒も強くなった。あれだけの惨めな目に遭い、悲

しい半生を過ごしてきた私は、世間人も恐いとは思わなくなっていた。

しかし、私も段々と年を取り、七十歳近くになってきたので、健康なうちにそろそろ老後のことを考えて金を蓄えなければと思うようになってきた。

子供もそれぞれ自分たちの生活を守っているし、王も子や孫に囲まれて健康でいるようだし心配はない。姪の悦子も家族全員で引き揚げてきたので、もう中国には何の心配の種もなくなった。

振り返って、静かに考えるに、私の人生とは一体何だったのだろうか。十人の兄姉妹の六番目として生まれ、心も体も両親に似て元気に育った。幼年期を福島で過ごし、一家を挙げて国策に応じて満州に渡った。広い天地で男に負けずに、精いっぱい活動してみせると張り切って思春期を過ごしていた。当時活躍していた各界の女性の話を聞いて、私はどんなことができるだろうかと思ひ、勉強に励み、心躍らせ希望に胸を膨らませていた。他の人よりも大きい望みを持ち、必ず達成してみせると固い決心をしていた。それなのに、

現実には百八十度異なり、あまりにも惨めな結果だった。私の夢も人生も、小さなものになってしまった。

世間は私を悪い女と言ひ、王少清に同情するが、別に犯罪を起こしたわけでもなく、すべて時代の流れの中で起きた、悲喜劇の一つであった。戦争のもたらした一コマであり、それにやむなく飲み込まれた犠牲者の、恨みつらみの因果であろう。

今の私は、人に迷惑をかけずに、人に厄介にならずに、お国のために少しでも役に立つ心積もりで、働ける限り働き続ける覚悟で毎日を過ごしている。私の小さくなった人生は、まだまだ続くのだ。

そして今でも、あの赤い夕日の満州には、十四歳の張り切った少女が、父や、姉や、妹たちと共に、いきいきとして生きているのだ。

あの戦争がなかったら、私も一生を一人の日本人として、人並みの人生を歩んでいたろう。私の戦争による傷跡は死ぬまで、否、死んでも消えないことだろう。私は忘れない。